

(続紙 1)

京都大学	博士（教育学）	氏名	坂田 真穂
論文題目	ケアを職業とすることがもつ心理臨床的意味 -看護師の心理的疲弊とその支援から-		
(論文内容の要旨)			
本論文は、患者のケアに携わる職業である看護師の心理的疲弊という深刻な現代的課題に対し、看護師の心理的疲弊の真の意味での理解と支援には、ケアという人間的行為が本来的にもつ意味を理解した上で、ケアによって生じる心理的疲弊の在りようの実際に向き合い、その心理的支援を実践する必要があるとの問題意識の下で論じられている。 論文は上述の問題意識を明確にした序章に始まり、「ケアをすることの意味」と題した第Ⅰ部、「ケアによる心理的疲弊」を扱った第Ⅱ部、「ケアをする者への心理的支援」を論じた第Ⅲ部、そして本論文のまとめと発展的課題に言及した終章から構成されている。 第Ⅰ部は、ケアという行為がもつ意味についての裾野の広い論考である。第一章「成り立ちからみるケアの意味」では、ケアという行為のもつ意味が古代におけるケガレを扱う行為から中世における神への奉仕すなわち贖罪行為へと変遷し、近世における科学的行為そして近代においてはナイチンゲール看護以降の専門的訓練や科学的根拠に基づく職業として認識されるに至った歴史的経緯が解説されている。 第二章「ケアとケガレおよび女性性」では、ケアを担うことの多い女性がケガレを内包する存在とみなされていた背景には神の対抗意識を煽るほどの女性の不思議な力への畏敬があること、その力は生殖能力や豊穡性といった生命エネルギーを生み出すものでありケガレは生命エネルギーと表裏一体であることが考察されている。 第三章「ケアの身体性と互酬性」では、看護者の身体をもって行われる病者のケアにおける特性が、それぞれ排便ケア、清拭、入浴介助に関わった看護師の事例から考察され、そこから見出されたケアという行為に機能する身体の道具性、身体と精神の両義性、主体と客体の両義性、身体の言語性といった諸特性について論じられ、ケアが両者にとって自己の存在意味すなわち実存感を体験する行為であり、両者に生きるエネルギーを与え得る互酬的行為、すなわちケアは病者という外なるケガレにケアする者の内なるケガレおよびそれと表裏一体の豊穡性が出会い、ケアという行為を通じて互いのケガレ、すなわちケ(気)が枯れた状態に生命エネルギーを与え合う行為であると、ひとつの結論が導き出されている。 第Ⅱ部では、ケアがケアする者に深刻な心理的疲弊をもたらす点について検討がなされている。 第四章「ケアによる心理的疲弊に関する先行研究」では、看護師に心理的疲弊をもたらす外的・内的要因を抽出し、それらの要因の交錯が人とひととの関わりの上に成り立つケアという行為であること、人の生命や人生に深く関わる仕事であることという、ケアの本質的な様相が指摘されている。 続く第五章「ケア現場での惨事遭遇による心理的影響」では、暴力や事故、災害、自殺等の惨事に遭遇することによってケアをする者が陥る心理的疲弊に関して、患者の自殺に遭遇した看護師に対する惨事遭遇による心理的影響および支援のあり方を面			

接調査した結果が報告、分析され、「職場内支援」としてカウンセリングといった「専門家の介入」、スーパーヴィジョン等において専門家に抱えられながら惨事遭遇時の心理的苦痛に向き合う「臨床教育」の必要性が論じられている。

第Ⅲ部では、医療現場に設置されている職員相談室における臨床実践や自験例から、ケアをする者への心理的支援が検討されている。

第六章「ケアを職業とする者への心理的支援の実践」では、「院内職員相談室」の設置から運営までの自身の体験が報告されている。

第七章では、実存感をもたらすケアと心理的疲弊をもたらすケアの相違について検討がなされると共に、ケアによる心理的疲弊への支援のありようが事例報告を中心に考察され、ケアの有意味感がケアする者の実存感を支えること、患者の回復や感謝および承認によるケアの実感が他者の役に立てたという実存感に繋がること、使命感を認識することによって実存感が満たされることが、それぞれ明らかにされている。

終章では、ケアを受ける者の体験からケアの意味を探究するという課題が提示されて締めくくられている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文の価値は、超高齢化社会における現代人の生にとってひとつの大きな課題であるケアという領域に、心理臨床家としての臨床実践体験をもとに、その意味を論じることによって、心理臨床学からの実践的寄与の可能性・必要性を明示したところにある。また、この点で心理臨床実践の現代的意義をも提示した論文となっている。加えて、一般用語・行為として認識される傾向のある「ケア」の専門性を豊富な事例報告と論考によって明らかにした点でも価値ある論文と評価できる。

本論文の視角は、ケアに従事する職業である看護師の心理的疲弊とその支援にある。そこには、時代に先駆けて地域拠点病院に自ら院内職員相談室を設置し、十数年に亘り看護師の心理的疲弊に心理臨床家として向き合い、その語りを聴き、支援してきたという、著者自身の心理臨床実践経験が基盤となっている。

著者は、1980年代から看護師の心理的疲弊に関する国内外の研究が増加の一途を辿り、職場環境や労働条件等の外的要因や、看護師の経験年数および性格特性等の内的要因など、多面的にその原因究明や対策に関する検討がなされてきているにも関わらず、それらが心理的疲弊に陥る看護師の支援にはつながっていないことを自身の心理臨床実践から実感し、ケアを職業とする看護師のその行為がケアする者すなわち看護師自身にもたらす心理臨床的意味が、この領域における研究ではほとんどまったく探究されていない点を指摘している。すなわち、ケアという行為の背後にある人間的感情やその行為の心理臨床的意味の検討が決定的に不足しているために、研究が支援の実際につながっていないとの著者の問題意識を明確にした上で、ケアという行為を具体的な状況や個人の要求に対してなされる応答という人間的行為と定義づけ、ケアの歴史的変遷を探究していく。そのなかで、ケアにおけるケガレ概念との関係を論じつつ、人間は誰しも内にケガレを秘めた存在であり、そのことが病者という外なるケガレと共鳴することにより人々をケアへと駆り立てていくのではないかと注目すべき論考を行っている。この論はさらに展開し、中井久夫の「惻隠の情」を引き合いに出しつつ、「相手が満足できること、相手のためになる全てを指してケアと呼ぶといえるだろう」と自身の心理臨床実践から指摘する。この点は著者も引用しているように、現代におけるケア論の世界的権威である Kleinman, A. がケアという行為を「他者や自分自身のために行う良きこと」から、他者と共に「存在すること」と、より実存的な在りようにケアの定義を水路づけていることとも関連している。すなわち著者は、ケアの専門性を、ケアをすることによってもたらされる実存感が人をケアへと向かわせると論じるのである。こうした論述はある意味で皮肉な現実を浮き彫りにする点でも興味深い。それは、もっとも人間的行為を行うことが現代人にはきわめて心理的疲弊感をもたらすという現実である。またそこに実存感の体験を見出そうとしているところに本論文の価値があると言えることができるであろう。

また、本論文に厚みと実際性を増しているのは、決して思弁的にならずにあくまで心理臨床実践に即してケア論を展開している点である。たとえば、医療の場で起こる

自殺等の惨事に直面した看護師に対して面接調査を行い、その心理的疲弊について論じられているが、かかる面接調査は研究と支援の実際をつなぐものでもあると言え、著者の豊富な心理臨床経験が活かされているところである。

最終的に著者は、ケアの本質はその行為の結果にあるのではなくプロセスにあると結論づけているが、これは医療従事者との心理臨床実践から生まれたひとつの知とすることができる。

このように本論文は現代人の生を考える上できわめて貴重な内容を豊富に含んでいるが、問題点がないわけではない。口頭試問では、自己実現や実存感などといった用語の使用法や定義の問題、実存というあり方について、ケアの本質についてより深い考察の可能性、ケアする者の罪悪感等について議論された。しかし、これら諸点は本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ著者の心理臨床学者・心理臨床家として今後の課題として、創造的営みの内に置かれるものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 28 年 1 月 19 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降